教育実際指導研究会より（2）

幼児の体育

的経験から

村田修子

今年も又新らしい人を迎えた幼稚園の庭には、新らしい人も、前からの馴れた人達もみんながいりまじって、楽しそうな笑い声がきこえ、遊びがくりひろげられています。

お子さんは何時のときでも変らずにブランコをこぎ、逆さになってすべり台をすべりおり、ジャングルのてっぺんを飛行機などにして遊びたわむれています。

このなごやかな絵のような幼稚園独特の景色は、昔も今も余り変ったものではありませんが、私が何年か前に始めて幼稚園というものを知ったときと比べますと、幼稚園のこと全般について色々研究が進められてきたからということもありますが、そのよしあしはさておいて大変に学問的・理論的に変ってきていることを感じます。

それで、この絵のような、いつにかわらないお子さんの動きの中から、私もそういう気持のもとにしたこと、感じていることをあげていきたいと思います。

昨年は幼稚園にそなわっている遊具（運動具）について、その目標とか、体育的効果についてあげてみましたが、それらがどのように利用されているか、ということについてみましょう。

☆遊具の利用

五月になってお子さんも幼稚園の環境に一応なじんできましたので、それらをどのように利用しているか、年令的にはどうか、ということをみるために次のように記録をとってみました。

こういうことをしますにも保育に当っております吾々は日常の保育をなげうって、というわけにはいきませんので、毎日ではなく、手のあるとき、朝の九時二十分から三十分間、午後十二時二十分から三十分間を五分ごとにどういう人が何をしているか、ということを書いていきました。こういう時間をえらんだのは、朝九時前後に登園してきたお子さんが自分の気持のままに十分活動していることの多い時間だからです。午後もそういう気持のもとに大体の人の食事がすんで、お帰り前の体操が行われる間の時間をとりました。

これは使用する人の年令をみたかつたもので、記録の方法としては余り意味のないものだと思いますので、ここに数字として上げることは出来ませんが、次のようなことを感じたり再認識しました。

・三才児は人数が少い上、年令的にいっても行動範囲が狭いために幼稚園にある体育的遊具のうちブランコを除いては余り使用し

ていない。そのため記録したときも気をつけて探すようにしなければならなかった。

・遊具の中でブランコは各年令層に、いつでも利用されている。ところが四才児の方が使用率が高い。それは、五才児になると遊びの範囲が広くなり、友達同志で遊びをみつけて、遊具ばかりによらないで遊ぶ。

・どの遊具でも養成科の生徒や学生、先生方がいるところには色々の年令の人が集っていく。あの小さなすべり台に十六人も参加していたこともあった。

低鉄棒・太鼓橋のような技術的な面をもった遊具はそれがとてもはっきりしている。自分一人ならばぶらさがるだけの低鉄棒も、先生に補助してもらえば逆上りも前まわりしておりることも出来る、というので、大人がそこにいけば、幾らかでも興味をもっている人はサッと集ってくる。

・比較的動きの少いジャングル、低鉄棒は誰も利用していない時間が、他の遊具に比べると一番多い。

このようなことでした。

☆子供の遊びと環境・経験

お子さん達がこのように、いろいろの体育的遊具を使って遊んでいることを考えてみますと、少くとも小学校の中学年位になりますと、その体育的な活動は運動技術の獲得とか、上達するために、という目的ももたれてきます。

ところが幼児期にあっては、その活動がはっきりとした目的をもたないのが普通です。そして、遊具の使用度をしらべたときにもあらわれてきたように、自分たちから進んで遊具を使って遊ぼうとしない人たちでも、自分に親しみのある先生がその場所にいけば、ただ行っただけで、その遊具を使って遊ぶ人がワーッとふえる、ということや、遊べないでポカンとしている人たちの手をとって、鬼ごっこやブランコに誘導していって、「先生も一緒にしている」というようすをする、というように動機を作ってやるだけで、大体はその遊びにとけ込むことが出来るものです。

幼児はこういうように環境に影響をうけることが非常に大きいことを感じます。

このように物的環境は勿論、人的な環境も考えられます。又それと同時に、環境がどんなに整っていても、それを用いる各人の素質というものや、経験によって運動能力というものに差異ができることが考えられます。

☆幼稚園経験児と新入園の比較

そこで三年保育からの四才児と、この四月入つたばかりの四才児について調べてみました。年令が小さかったにしても、幼稚園生活を一年経験した四才児は、幼稚園の普通の生活でもゆとりをもっている、ということが感じられます。

次の観察は少し運動技術を主にしたような見方になりましたが、遊具についてのこなし具合（つまり運動能）でも大変差異があるように思われました。

観察対照……四才児の生れ月のおそい組のお子さん、三十八人

（三年保育…十八人　二年保育…二十人）

始めに三年保育の人の、遊具を使っての運動能の発達工合をみてみますと、

・太鼓橋

入園したときは出来なかつたが、大きい組の人のするのをみたり、一寸手をかしてもらったりして、五月頃一人で間からくぐっておりたりする高度の技術が出来るように

なった人　八人
秋頃出来た人　三人
冬頃出来た人　三人
出来なかった人　四人

・ブランコ　は五月頃大体の人が一人でのれるようになり、夏休み中に出来なかった一人がのれるようになった。

・ジャングル　は五月頃二、三段しかのれなかった人　六人
九月頃上までのれるようになった人　五人
四才児の組になって登れるようになった人
一人

次にその組に新らしく入ってきた二十人の人について四月中頃に記録したところでは、

・太鼓橋
前の十八人のうち、間からおりられない人が四人であったのに比べると
出来る人　三人
段の途中又は上までのぼれる人　十二人
全然しようとしない人　三人

・ブランコ
のれない人はないようですが、ブランコの振れ工合と、自分の身体のバランスがとれないですぐにやめてしまつた人が一人ありました。

・ジャングル
大体は上までのぼれる
二、三段までのぼる人　三人
全然のぼらない人　三人

・すべり台については全部がうまくすべれました。

こうして比べてみますと、年令による発達ということと共に、それらを経験する時期の早いかおそいか、ということが大変に影響してくることもはっきりとわかりました。

けれどこのように出発点では差異が認められますが、心理学の色々の実験にもあらわれているように、そう遠くないうちに皆が同じようになる、ということは考えられますが、経験させることの大切なことが痛切に感じられます。

又ブランコとか、すべり台は世間一般にも普及していて、日常ふれる機会が割に多いものなので、三年保育と二年保育の人の差異は余りありません。

こういうことからも、経験による影響というものがうらづけされると思います。

こうして運動能力というものの記録をとってみますと、お子さんについて、どうしても素質と経験と環境というものによる影響があるように思います。

一般的な素質というものは遺伝的なものとして認められますけれども、その人の健康状態、意志、環境条件がどうであるか、ということによって運動的な才能が現われるということはいえると思います。

ですから運動をしない人、運動方面に消極的な態度をとる人も、それはそういう才能がないのではなくて、別にやろうとしないからだと思われます。従ってこういう人も環境的に運動を余儀なくさせられたり、自覚して自分から運動をするようになれば、運動をする人、運動能力のすぐれた人になるかも知れない、とも考えられます。

こういうことからも、これをひき出すような環境におく、ということ、つまり幼稚園では、皆が楽しく色々の運動に参加し色々の経験をするようになる、ということが体育の大切な目標の一つになると思います。

☆体力検定から

昨年の秋、走・跳（立巾跳、片足連続跳）

投・懸垂・荷重疾走等の体力の基本的なものの検定を行いました。(附属学校の研究課題)

その結果は次表の如くで、昭和十七年児童母性研究会で出された基準よりは、記録的に少しづつよくなっています。

	3才		4才		5才	
	25m疾走					
	男	女	男	女	男	女
当幼稚園	7.79秒	8.32秒	7.05秒	7.63秒	6.04秒	6.74秒
研究会	(9.07)	(10.87)	(7.79)	(8.27)	(6.59)	(7.20)
	立巾跳					
当幼稚園	92.7cm	74.0cm	101.8cm	92.1cm	130.3cm	108.2cm
研究会	(56.3)	(58.08)	(89.2)	(84.2)	(105.1)	(97.9)
	荷重疾走					
当幼稚園	5.02秒	5.14秒	4.07秒	4.22秒	3.29秒	3.58秒
研究会	(8.42)	(6.48)	(4.52)	(4.74)	(3.85)	(4.16)
	懸垂					
当幼稚園	71秒	77秒	83秒	83秒	60.8秒	98.6秒
研究会	(41.44)	(40.0)	(60.06)	(67.76)	(80.6)	(73.6)
	球投					
当幼稚園	4.51m	2.64m	6.09m	4.01m	9.96m	5.03m
研究会	(3.35)	(1.95)	(4.83)	(3.39)	(7.21)	(4.40)

この検定の個人の記録をみますと、ここにも幾分あらわれてきていますが、私がいつも痛切に感じていることは、幼稚園に入る前の環境というものが、この時代の運動能力に大変影響がある、ということです。

用心深い人(多くはおばあさん)にそだてられた人や、普段余り外に出ないで家の中ばかりでそだった人達の中に、特に脚力の弱いお子さんをみうけます。大切にされた余り、おんぶされる事が多かった為の影響です。

こういう人は膝が弱く従ってバネがなく、大腿筋が弱いので、歩くときも膝が上らず脚がつっぱっていてあしをひきずるようにして歩いたりスキップをしたりします。ころぶことも多いようです。私の組にもこれのはっきりした人がいます。そのうちの一人は、今迄一番すきだった絵をかく事を余りしなくなり、目下太鼓橋に興味が出たらしく、さかんにしていますので、私は今後のかわり方に興味をもってみています。

一般に体育では目標の一つに性格の育成ということをあげます。

具体的な事項としてあげてみますと、積極性・忍耐・自制・協同・責任感・同情・フェアプレー等が最も重要なものとしてあげられます。それは、体育というものが実践的な内容を多分にもっているので、そういうことが比較的可能になる機会が多いので、必然的にあらわれてくるのです。

未分化である幼児においては、こういうものをはっきりとした形で期待することは出来ませんけれども、たとえば、太鼓橋で皆と同じようにすることが出来るようになったことに自信をもったお子さんが、生活全般に活気をもってきて、何でも皆と一緒に積極的にす

るようになったとか、普段の生活の中から幾分こういう気分があらわれてきていることを感じることが出来ます。

おしまいに、最近私が経験している一つの例をあげて終りにしたいと思います。

三才のときから幼稚園生活を経験した七月生れの五才男児（発育は標準以上（身長一一四・五cm、体重二一kg）入園したときは一人っ子、現在は妹、弟一人づつ

科学的に性格検査とか社会性の検査をしたわけではありませんが、日常接して観察したところによりますと

一見したところでは勢力的でリーダー格にみえる。けれどそのわりに皆をまとめているというのではなく、一人っ子であったという環境から、集団の中に入っても自分一ぱいに振舞う、乱暴なことをしても自分の思うことを通す、という点が他のお子さんに威圧を感じさせている。

その反面気が弱く恥かしがりやで、皆の前で一人ですることは何もやらない。けれど個人的に話し合いなどすると思いがけないやさしい言葉がよくきかれる。

動作、態度はきびきびしているという方ではない。遊びは砂場、つみ木が多く、ブランコにはのるが、特にそういうものがすきであるとはいえず、俗にいう運動神経が発達している方とは思えない。

大体三才、四才の秋頃まではこういう様子でした。四才の秋の或る日、突然鉄棒に両足をかけてぶらさがり両手をはなして私にみせました。私は予想もしていなかった事、しかもその当時他にもう一人しか出来なかったようなことを突然やったので本当に驚いてしまいました。実は手をやいていた一人なので、私はこれをみて、さっと頭をかすめたものがありました。それは、こういう事をするようになったのが何かのきっかけになって何にでも自信がもてるようになるのではないだろうか、ということでした。それからつとめてその子の相手になって何かするようにしました。それで色々の話しをしているうちに、お家に鉄棒が出来て猛練習しているのだ、ということを知りました。それでも、まんなかの組の時はいろいろ問題の多い方でした。

ところが、この四月から急に行動が衝動的でなくなり、落着きをみせ、人の言動にひきずられて行動するということが余りなく、かえってそういうことを批判する言葉さえきかれました。家庭でも同じように落着いているので家の人に何か云われることがなくなったため、反対に「どうしてこのごろ叱らないの」等と云ったりするそうです。

五才児になって、当然落着く時期がきたのだ、ともいえるでしょうけれども、この場合はそれと共に環境によって得た自信というものが、行動、大きくいえば性格というものに大変影響を与えている、と考えられます。私がアッと思ったときに感じたことが本当になりつつあるのをみて、うれしく思っています。

（お茶の水大附属幼稚園教諭）

メモ

夏期保育講習会

七月二十三、二十四、二十五日の三日間日本仏教保育協会主催のもとに、夏期保育講習会が、文京区淑徳学園において開催された。